ぢしんの考

そも天地の間は陰陽の二気を以て元とし此の二気和順する時は穏なり其地の要たる九万里めぐりて四圍ふ敷あると雖ひは蜂の巣のやくまさ菌の瓣よ似たり水火ことを潜まて出入も起るふ陰気上ふ閉ぢ陽気下に伏まるを発升らんとまるふ升ることを得ず固て地潮ふ脹を時をまち陰気を突破つて勝ることの甚大地大ふ震ふたゝ人ば豚を焼て火気その心ふ逃まべ潮ふ脹まあるゆめし故ふ強き地震は指め発する時地下より泥沙を吹出し大地陥ゆめく崩ゆる ハ陽気発して外の脹まる地中の空穴緒まるえされども一時ふ緒ることなきに固て一至積ふ二六十度或ひは二三十度少く震ひて漸くふ元ふ復もかれば大地震の後ふ震ふ事なき ハ猶の如ごと元大震ハ行ることの理と

昔より今ふ至る和漢の大地震度々ふ聞ふ史ふも地人の譚ときくふ震ふ形のやうを考まるとやふ大ふ震ハ人ふ日を定めて大道ふ夜家を造ふ人家風ふあひ夜気ふ乗ひて竟ふ疾ひと発まる我ふ少もこの理を知まらん人ハ怪見ふ驚ふ値して久しく暗傷まる者ふ至ることなくつまし

○信濃ふ人地下ふ鯰あり其の尾頭を動ふ地震ふ震ふ人その據を詳ふ建久九年の暦の表紙ふ地震の形を画き図ふ六十六州の名を記ふ六七百年以前より流行ふ俗ふ伝ふ誘の所為ふ人古代の説ハかのやうと地震考ふ書ふ記せり思ふ当時雑書ふハ必ふこの図を載ることなくその形もまた鯰ふあらぬ我ふ類せる事ふ今まこその図とふ似て寅卯二年地震津波の災異ふ同じ国々を一眼ふ見まる同的と云ふべし

ぢしんの考

はじめて嘉永七甲寅年十一月ふ同大地震あり

はじめて月日地震の後沖合ふ出て夜半時ふ大津波ふ成り場所あり

はじめて安政二年十月二日夜ふ時ふ東海道ふ大地震の分 但此節津波ハ

むつ
ひたち
しもつけ
ゑちご
かづさ
あわ
むさし
かうづけ
しなの
さど
ちくご
ぶんご
ひうが
ながと
うと
きう
ひご
ちくぜん
ぶぜん